

20 深い学びを視点にした授業改善の実践

楽曲にふさわしい表現を自分たちらしく創り出す学習



こんな実践

音楽会に向けて、楽曲にふさわしい表現を求めて追究していく中で、歌詞の内容を考え、楽曲の構造を理解することを通して、生徒一人一人がその楽曲ならではの特徴に気付いたり（知覚）、楽曲のよさや美しさを感じ取ったり（感受）することができるようにした実践。

学校名 M中学校

実践学年 3学年

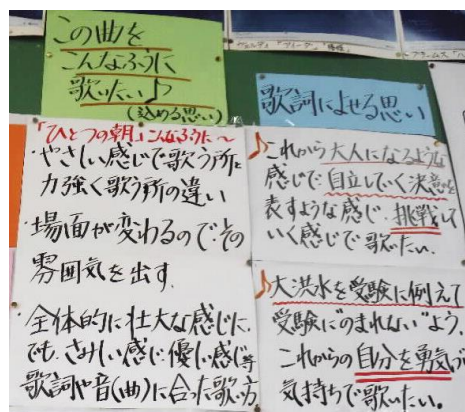
実践時期 9月中旬

題材名 歌詞や音楽から情景や場面を想像し、歌い方の工夫を考えて表現しよう

学習指導要領との関連 : A表現 ア、イ (ア) 及びウ

○楽曲の全体像を把握し、ふさわしい表現を見出す場面

混声四部合唱「ひとつの朝」で曲のまとめの場面でもある「生きる喜びを～」を取り上げて歌った自分たちの録音を聴き、気付いたことを発表するよう促すと、「バスがきこえない」「他のパートの声が大きすぎるから」と次々と意見を出しました。そこで、旋律の重なりに目を向けるよう促し、楽譜に示されている強弱記号やテクスチャの効果、作曲者の意図について考え、何度も出てくる「生きる喜びを」「広がる自由を」が楽譜上ではどのように表しているのかに注目するよう助言しました。パートごとの話し合いでは、4つのパートの重なり方と役割、強弱表現についての意見が多く出されました。自分の知覚・感受したことと歌詞の内容や曲の特徴を関わらせながら、そこから考えたことを積極的に伝え合うことで、作曲者の意図を読み解きながら、目指す表現の全体像を共有することにつながりました。



「この曲で、こんな感じが表れたらいいな」



ここがポイント!

- ・実際の録音を聴いて、楽曲にふさわしい表現を考えたり、共有したりする場面を位置づける学習活動は、クラス全員でひとつの表現を創り出していくために大切です。



○曲の全体像を理解した上で効果的な表現をグループで追究する場面

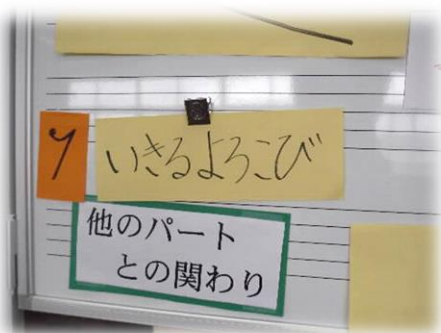
意見交換して目指す表現を全員で共有した生徒たちは、最初のような一本調子な歌い方ではなく、曲の特徴を意識し、その効果を感じ取りながら表現を工夫していきました。またグループ（パート）追究では、特に強弱に注目しながら何度も練習していくうちに、全員が楽譜から目を離し、互いの表情を見合い、聴き合いながら何度も歌い合っていくことができました。そのころには「楽譜に指示があるから」という意識ではなく、「私たちはこう歌いたいんだ!」という強い思いや意図を持ち、一人一人が曲に向き合い、よりよい表現を求めて主体的に取り組む姿がみられていました。更に、追究してきた工夫を歌い合い、目指す表現を創り出す場面では

- ・「広がる～」で周りの声に合わせてながら、声量を上げていき、きれいに決まったときはとても気分がよかった。
- ・「バスパートは、他パートとの関わり方を考え、工夫することにより、自分たちの役割を果たすことができ嬉しいし、楽しく歌うことができた!」
- ・こうやって考えて歌うと、曲がどんなふうになられているのか分かるし、さらに歌詞を大切にしたいと思うようになった。

等と記述する生徒が多く、自分たちで創り上げる楽しさを実感することができたと考えられます。



グループ活動の様子



「この言葉は楽譜上では、どのように表れているかな」



ここがポイント!

- ・曲の全体像を理解する中で、自分と他パートの関わりを意識できるよう、自分のパートの役割を理解した上で表現方法を工夫できるようにしていくことが大切です。

まとめ

- ・表現の全体像から、自分のパートの役割を理解できるようにした（A表現イ(ア)）ことで、楽曲にふさわしい表現の工夫をした（A表現ア）り、他パートのことを考えて合唱したりする（A表現ウ）姿につながっていきます。